

☆☆



せりがやだより

横浜市立芹が谷小学校 令和5年2月学校便り

☆☆

互いの気付き合いで豊かな世界を

副校長 富永 亮大

本格的に寒さが厳しい時期を迎えました。新型コロナの感染対策を変わらず続けるなかで、その対策の効果で、昨年までは流行しなかったインフルエンザが、今年度は同時に発生する新たな状況が起きています。どちらに対しても、マスクの着用や手洗い・うがいの励行など共通の方法が有効ですから、引き続き留意し、努めるよう対応します。

さて、その対策の一環でもあり、横浜市の施策として、冬休み明けから全学級と特別教室にCo2(二酸化炭素濃度)モニターを設置し、室内の換気状態を数値で客観的に確認をすることができるようになっています。これまでも子どもたちが登校する前には、校舎内の教室や廊下、トイレなどの生活空間の窓を開けて、換気をしている状態から一日を始めるようにしていますが、時折、子どもたちが教室に着くまでにそのための巡回が間に合わない日もあります。感染対策が今ほどたいへんではなかった以前には、低学年の間は、窓の開け閉めを担当する係活動があり、それは高学年に上がるにつれ、日直の当番活動の一つに含んでいくようにして、係活動のあり方を高めていく流れがありました。自らの生活の場は、自ら効果的に条件整備をすることができるようになるのがねらいです。しかし、前述のとおり、現在は子どもたちが教室に着く時点ですでに換気をしている状態にするのですが、それが登校後になることがあるのです。こうしたときに、必ずしもではありませんが、発達段階による興味深い傾向の違いが見られます。低学年の教室では、「おはようございます。」「ありがとうございます。」といった声を伝えられることが多いですが、中学年になると、「あ、副校長先生。(自分が)開けますよ。」とこちらがしようとしていることに気付いて、自ら動く子どもが増えます。さらに、これが高学年になると、教室に入ろうとすると、「大丈夫です。もう開けていますよ。」と子どもが先回りをしているほどになります。

実は、芹が谷小学校の大人の中にも、毎朝、校長や私が巡回をする前に、自分の学級だけではなく、その周辺を含めた教室や廊下、トイレの窓を開けたり、靴箱に並んでいる上履きをきれいに揃えたりして、子どもたちの登校を待っている先生や職員がいます。

こうしたさりげない気遣いや気配りがあることは、自分から同じようなことをしようとしていれば気付けることがあります。そうでなければそうなっていることが当たり前になり、気付くことができません。気付きがなければ、自ら為すこともないでしょうし、他者に対して感謝の思いを抱くことも少なくなるでしょう。こう考えると、互いに「気付き合い」が多い社会はとても豊かになるでしょうし、その反対は味気のない、さみしい世界になるように思います。誰もが自分では気付いているつもりではいるとは思いますが、でも、もしかしたらもっと気付けることがあるかも知れないと思い、努めると、気付きの広がりや深まりをさらに増すことができるでしょう。他者のことを考え、その足しになれるように自らに磨きをかける。そうした自己点検を絶えず続けることができる人になりたいと思います。

とも **共にチャレンジ** かがや **みんな輝け!**

全校ウォークラリー～たてわり班のみんなと力を合わせて～

12月14日(水)の3・4時間目に全校ウォークラリーを行いました。たてわり班の友達と、9個のチェックポイントをめぐり、ミッションに挑戦します。ミッションをクリアすると、担当の先生から問題が出されます。たてわり班の友達と協力してミッションに挑戦したり、問題を解いたり仲良く協力する姿が見られました。6年生は、1～5年生を優しくリードするなど、リーダーとしてみんなをまとめようと頑張りました。

体育館では、「風船を落とさず15回ふれてください。」と、4年生が同じ班の友達に、ミッションを伝えました。みんなが風船に触れるように、「まだ触っていない人いる？」と声をかける姿が微笑ましかったです。



校庭では、長縄で20回大波小波しました。ミッションをクリアしたとき、みんな笑顔になれました。



ミッションをクリアして、先生から出された問題を解きました。みんなで考えると、答えが見つかることができました。

書初め～めあてをもつてのびのびと表現～



1月11日(水)～13日(金)の期間に、各学年で書初めを行いました。各学年それぞれにめあてがあり、そのめあてを意識して書きました。鉛筆や筆を持つ手をゆっくり動かし、集中して文字を書く姿が印象的でした。子どもたちがのびのびと書いた作品は、教室前の廊下や職員玄関前に掲示しました。



3～6年生はいつもより長い半紙を使うため、体育館で行いました。



クラス代表の児童の作品は、職員玄関の掲示板に掲示しました。

給食ありがとう週間（食育）

～明日の自分をつくるのは、今日のごはん～

1月16日（月）～20日（金）の期間に、給食ありがとう週間を行いました。三色の栄養素を意識してバランスよく食べ元気に過ごすために、めあてを立てて取り組みました。「苦手な食べものを食べてみる。」「おいしく食べることができてうれしい。」など食事に対する意欲が高まりました。高学年は、その日の献立に使われている食材を色別に分類することもしました。今後も、食育の観点から元気な心や体づくりを続けていきたいです。

「調理員さんに感謝を伝える手紙など」をつくり、給食室前の廊下や給食室に掲示しました。



「ふつう」を疑う勇気～

児童支援専任 白川 啓介

先日電車に乗る前にふと考えたことがあります。電車が来るときによく聞くアナウンス「黄色い線の内側までお下がりください。」の内側は、どこを指すのでしょうか。ふつうは、電車から離れると思います。しかし、黄色い線の内側は、ホームの中心側なのか、ホームドア側なのか、どちらを外側にすることで「内側」の意味は変わってしまいます。そこで、少し調べてみることにしました。

調べてみると、言語の壁がある外国人は、内側の意味が解らない人も多いそうです。先ほどの例はもちろん、「黄色い線の内側」と聞いて、黄色い線の上に立って、「なんでこんな狭いところに？」と思うこともあるそうです。また、黄色い線は、点字ブロックで出来ていることが多いです。視覚障害のある方の中には、「黄色」を認識できない、しづらい人もいないのでしょうか。もちろん、こういったアナウンスになっている理由は、様々あると思いますが少し考えさせられました。

普段何気なく、聞き流している言葉は「ふつう」であって、気にしない人が多いのではないのでしょうか。「ふつう」は、たくさんの人がそう感じているだけで、誰にでも当てはまる言葉ではないという事を感じました。

大人が子どもに指導するとき、つい「ふつうはできるでしょ。」と言ってしまふことがあります。また、子ども同士の会話にも、「ふつうわかるよね。」という言葉が聞こえることがあります。「常識とは、18歳までに身に付けた偏見である。」という言葉もあります。一度自分の「ふつう」を疑って、自分がふつうと思っていることは、本当に正しいのかを考えると視野が広がるかもしれませんね。